

伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第44号 2009年2月

〒214-0014

神奈川県川崎市多摩区登戸 3460-1

パークホームズ 704

小澤昔ばなし研究所

Tel:044-931-2080

戦時下で錬磨された声

真鍋昌賢

わたしが浪曲研究に取組みはじめた頃（十年ほど前）に比べると、近年、浪曲がマスメディアに取り上げられる機会が増えてきた。主な理由として、若手の女性演者（浪曲師・曲師）の活躍への注目が挙げられる。現在、浪曲を聴いたことがない人々が興味をもつきっかけとして「女流」浪曲師が占める位置は、極めて重要になっている。浪曲において女流が主流になる日が、もしかしたら来るのかもしれない。

その一方で、浪曲史が語られるなかで、女流についての言及は副次的なものであったことは否めない。そこには、男性演者の声を代表させることで浪曲史の最大公約数が取り出せるという暗黙の前提があったように思う。浪曲史における女流の位置づけを、正面から論じた文章は皆無と言ってもよい。男性演者が多数であるという数量的な理由付けを一端留保して、生活思想の流通の仕掛けを明らかにするという視点に立つとき、女流への注目は、重要な意味を帯びてくる。「演じる戦争観る聴く戦争—口承文芸から戦争を考える—」（2008年10月25日第56回研究例会シンポジウム、司会・藤井貞和氏、企画構成・飯倉義之氏、）というテーマのもとに、浪曲史を考えるという宿題を与えられたときに、真っ先に気になったのは、まさにこの「女流」というテーマだった。

かつて「七色の声」と呼ばれた女流浪曲師がいた。二代目天中軒雲月（のちに伊丹秀子）である。雲月は1930～40年代を代表する浪曲師のひとりであった。それと同時に浪曲史上では、レコード吹き込みを最も多くおこなった女流でもある。「七色の声」とは、様々な登場人物を演じ分ける声色を駆使できるという意味のキャッチフレーズである。雲月のレコードを初めて聴く人は、ひとりですべての登場人物を演じ分けていることに驚く人も多かっただろう。演者自身の声の人格を消して、ラジオドラマさながらに聞かせてしまう雲月の語りは、「語り物」らしからぬ奇抜さを感じさせたと思われる。それゆえに、浪曲通のなかには雲月を酷評する人もいたのだが、雲月の大衆的な人気は業界トップクラスであったことは間違いない。雲月は老若男女を巧みに演じ分けつつ、特に銃後の女性の心の葛藤や生き様に焦点をおいて口演した。「七色の声」は、まさに日常化した戦争（銃後／戦地）を背景とした人間模様を劇的に描くなかで錬磨されていったのである。

声としての言葉を軸にしなが、生活の実存を支える物語・芸という側面から戦争体験・記憶の内実を論じていくこと、それが「演じる戦争・観る聴く戦争」にこだわる重要な意義のひとつであるだろう。各種メディアと結びつきながら、どのように「七色の声」がつくられ、受容されたのか、引き続き考えてみたいと思っている。

（大阪府）

第56回研究例会 2008年10月25日(土)
シンポジウム「演じる戦争・観る聴く戦争—口承文
芸から戦争を考える—」
会場 國學院大學渋谷キャンパス

米屋 陽一

司会者の藤井貞和氏から本シンポジウムの趣旨説明があり、その後、飯倉義之氏から「イントロダクション—いかにして『口承文芸から戦争を考える』か」との導入発言があった。時代背景や論壇・文壇などの発言を押さえつつ多くの文献紹介と事例報告がなされ、「ことばの流通としての『戦争』」「戦場の時と場にとじこめられることない、トータルな戦争に今・この問題として迫ることができる」と結ばれた。

真鍋昌賢氏からは、「戦時下に響く七色の声—浪花節における二代目天中軒雲月の位置づけ—」と題しての発言があり、「レコード会社・映画会社の戦時下の表象システムに深く組み込まれることによって、銃後の女性を語ることで新しい芸を獲得することが結びついてきた。還元すれば、家父長的世界観、それに基づく血縁・非血縁のからまりあう国家観を保管する位置にあった女流の声を雲月は代表する位置にあったといえる」と結ばれた。

丸山泰明氏からは、「パフォーマンスとしての戦争展示—遊就館から考える」と題しての発言があった。遊就館は1882(明治15)年に開館。震災による崩壊後、再建、廃止を経て、1986(昭和61)年に再開館、2002(平成14)年に展示がリニューアルされて公開され、現在に至る。「遊就館関連年表」を示された後に、「1. 博物館展示の語り方」「2. 展示室の変遷」「3. 展示される『敵』『勝利』」「4. 軍神・英霊の物神化」と展開された。近現代史の中での遊就館のもつ意味を明瞭に示された。

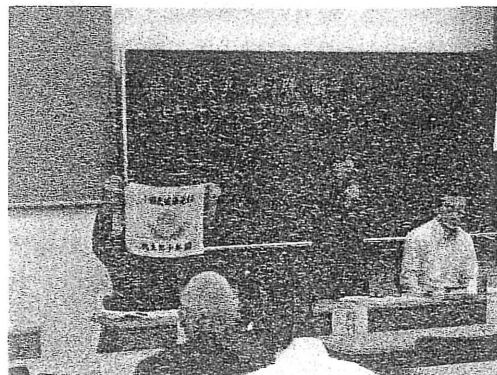
野村敬子氏からは、「『戦争体験を聞くということ—語るということ—』と題しての発言があった。新田小太郎氏は大正7年、山形県最上郡真室川村に生まれた。昭和13年に徴集、16年に任官。第36連隊に配属され戦地へ。21年6月復員した。野村氏は新田氏から昭和19年のこととして戦争体験を聞き、「ニューギニアの戦地で傷病兵に話・語りをして看病した体験者」であることを知った。新田氏は通常「雪部隊」に所属していた。「雪国出身者が多いことによる命名」であった。

新田氏は「マラリヤ、アミーバ赤痢、栄養失調などで倒れた兵士の看病を命じられた。「食べ物も薬もない中で死に行く兵士が多かった」という。そのような極限状態の中で「故郷のムカシカタリ」の伝承言語によって語ったのであった。「何とかして心安らかに、蘇生していく方法として病人たちと『話し語り』することを思い立

ち実行した。「故郷の懐かしい話柄、怪談、笑話、艶笑譚など、次から次に切れ目なく語ったという。それは「言葉が途切れると生命が消える感じ」がしたからであった。しかし、「四十数人を看取り、埋葬、供養」しなければならなかった。死に直面したときの誰にも話したくない体験談はこうして甦った。戦後43年目のことであった。野村氏は、「問わず語りの方法」を意識して聞いたという。

新田氏は「戦地の語り仲間『今義孝さん』を捕虜としてのこしてきたことに深く傷つき、朝日新聞の尋ね人欄『戦後45』で捜し出し、今さんとの再会を果たし、平成15年に没した。二人の紹介は野村氏の近著『語りの回廊—聴耳の五十年—』『男語り』に収められている。

戦後64年。戦争体験者のすべてが高齢者。いずれゼロになる日がくる。戦争体験談の聞き取りは急務である。これまでにヒロシマ、ナガサキ、オキナワ、東京大空襲や各地の戦跡、特攻隊基地の知覧などを訪ねた。それぞれの形で戦争体験が継承されている。沖縄県石垣市を訪ね「平和を語り継ぐ集い」に参加したことがある。地元の高校生が「戦争マラリア」体験者のオジイ・オバアから聞き取り、「一人称語り」を試みている。語り手のオジイ・オバアや家族も参加していた。聞くも涙、語るも涙の一場面に遭遇し、口承文芸の今日的な新たな役割を痛感したのだった。口承文芸から戦争を考える」本シンポジウムの内外への力強い発信は意義深いものであった。フロアとの議論する時間が少なかったのが少々残念であったが。(千葉県)



第2回国際研究フォーラム報告
植民地時代の昔話／グローバル社会の昔話
2008年12月6日(土)
会場 東京学芸大学

石井 正己

2008年12月6日、東京学芸大学において、「植民地時代の昔話／グローバル社会の昔話」をテーマに、第2回国際研究フォーラムが開催された。2006年3月3日、千葉大学において開催された「グローバル化のなかの口承文芸」を受けたものである（『伝え』第38号参照）。今回は広域科学教科教育学研究経費をあて、学会は共催という立場だったが、会長・事務局・国際会議委員会の全面的なお力添えによって、40名を越える参加者を得て実現することができた。

第2回としては、日本が最も早く植民地にした台湾を取り上げることにし、グローバル社会の展望を考えたいと思った。冒頭、会長の大島建彦さんが日本民俗学と植民地との関係を整理し、私が植民地時代の「日本」と台湾の昔話採集について述べた。講演をお願いした川村湊さんは、「文学における声と文字」と題して、植民地の文学と言語の研究から、金田一京助・西川満・中島敦の3人を取り上げた。

後半は「台湾昔話の研究と継承」と題するシンポジウムを企画した。まず、林佳慧さんの「台湾原住民の昔話と漢族の昔話」、游珮芸さんの「台湾における口演童話活動の展開」、伊藤龍平さんの「台湾における国語／日本語教育と昔話」、野村敬子さんの「台湾から日本に来た花嫁の語る昔話」の報告を順に行った。それらに対する議論の時間はほとんどなかったが、台湾の思い出や日本語教育などに話題が広がった。最後は事務局の中村とも子さんの挨拶で締めくくった。

川村さんは、「口承文芸は滅亡する」という考えに対して批判的であったが、国文学と民俗学、文学と口承文芸の溝は、思いの外深いものだと実感した。実はそうした議論自体、学問が細分化してゆく中で、これまで棚上げにされたままだったのである。後半では、昔話の民族移動、教室の中の昔話、口演童話の活動、外国人花嫁の語りなど新たな研究の方向が提案された。具体的な内容は、年度末に発刊する報告書で明らかされるはずである。ぜひともご一読を賜りたい。（東京都）

（右は会場の様子）

各地からの報告「出雲かんべの里民話館のこと」

酒井 董美

「出雲かんべの里」は島根県松江市大庭町にある。平成6年のオープンなので今年は15周年になる。これは松江市が作った施設であり、民話館、工芸館、自然の森から成るが、ここで取り上げるのは、その中の民話館である。

この館は木造平屋建てで276㎡。農家を模した建物であるが、中は事務室を除いて四つの部屋から成っている。一つはマジックビジョンの部屋で、小泉八雲の「耳なし芳一」が立体映像で視聴でき、向かいの伝承の座の部屋では、囲炉裏があり、語り手が来館者に昔話を語ったり、影絵やスライドによる民話を紹介している。

さて、語り手を引き受けている「とんと昔のお話会」（会長・野津正恵、岡村悦子、平野美津江、山田理恵）は、平素は1名、イベントの場合は2～4名が常に待機しており、来客にいつでも生の民話を語っている。特に事前に予約する必要はない。この点が類似の施設には見られない特色ではなかろうか。

次いで昔話コーナーの部屋では、山陰各地の昔話35話が、かつての民放「まんが日本昔ばなし」風に作られ、ボタン一つで視聴できる。

検索の座の部屋では、出雲地方独自の弁慶伝説（6話）、古事記神話（4話）と出雲国風土記神話（2話）が同様に視聴でき、さらに民話の説明や島根県内の伝説地図がパネルで一覧できる。そして小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）による松江市内の怪談が4話紹介されている。

詳細はパソコン上の「出雲かんべの里」のホームページ「民話館」で確認していただきたい。

なお、このホームページの「館長の部屋」では、私がかつて収録した山陰各地の昔話やわらべ歌が伝承者のそのままの声で聴ける仕組みになっていることも付言しておきたい。（島根県）



○事務局便り

○第 57 回例会のご案内（詳細別紙）

2009 年 3 月 7 日（土）午後 2 時から 5 時

場所 國學院大學 渋谷キャンパス

シンポジウム「口承文芸と女性—研究史に根ざして」

○受贈本（2008/年 8 月から 2009 年 1 月まで）

『民具マンスリー』第 41 巻 4 号から 10 号（神奈川大学日本常民文化研究所）

齊藤君子著『モスクワを歩く 都市伝説と地名の由来』（東洋書店）『悪魔には 2 本蠟燭を立てよ ロシアの昔話 俗信 都市伝説』（三弥井書店）

『日本民俗学』第 254 号（日本民俗学会）

『国立歴史民俗博物館研究報告第 139～144 集』（国立歴史民俗博物館）

藤かおる著『房総の笑い話』（寄贈荻原真子）

土屋北彦著『母の昔話』（日本民話の会 聴く語る創る 17）

佐々木達司・新田寿弘編『青森の「繁次郎話」』（青森文芸協会）

『アイヌ語地名を歩く—山田秀三の地名研究から—2008・渡島・檜山・津軽海峡』『年報 2007』
（北海道立アイヌ民族文化研究センター）

.....
日本口承文芸学会を広くご紹介下さい。

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局に連絡をするか、学会HP
（<http://ko-sho.org/>）から用紙を取り込んでください。必要事項を記入の上、事務局宛に郵
送、またはファックスしてください。

入会金 1000 円、年会費 4000 円です。合計 5000 円をお振込み下さい。

郵便振替口座 00180-4-44864 をご利用下さい。